

[別紙2]

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 上 野 昌 江

本研究は、地域母子保健活動において児童虐待（以下虐待とする）防止活動に取り組んでいる保健師を対象とし、保健師の実践知をカテゴリーとして導き出し、保健師による虐待問題をもつ母親への支援について明らかにすることを目的にグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてデータ収集、分析を行い、以下のことが明らかにされた。

1. 保健師による虐待防止に向けた支援として、保健師が母親の身体的、心理的、社会的状況における“しんどさ”が気になり、母親に焦点をあてて行う【“しんどさ”への支援】が中核カテゴリーとして導き出された。
2. 保健師による母親への【“しんどさ”への支援】は前提条件として、保健師が母親に出会ったときに《“しんどさ”があることに気づく》ことから始まる。そして《“しんどさ”に気持ちを寄せる》支援を展開している。《“しんどさ”に気持ちを寄せる》支援には、〈かかわりの糸口を探す〉、〈母親にとって心地よい関係をつくる〉、〈保健師を信用してもらう〉がある。
3. 《“しんどさ”に気持ちを寄せる》支援を行っていくなかで、母親の持つ“しんどさ”の内容が徐々にわかり《“しんどさ”の本質を見極める（問題の本質に対するアセスメント）》ことができる。それらは、〈孤立無援の状態にある〉、〈深刻な心理的問題がある〉、〈子どもを気遣えない〉である。
4. “しんどさ”の本質を見極め、保健師は《“しんどさ”を軽減する》支援を行う。《“しんどさ”を軽減する》には、〈つながりの気持ちを示す〉、〈母親が生活しやすくなるようにする〉、〈母親の気持ちを揺さぶる〉、〈母親の目を外に向ける〉がある。
5. 保健師の支援は《“しんどさ”に気持ちを寄せる》から《“しんどさ”を軽減する》へと進展していくが、それは、保健師に対する〈母親の受け入れにくさある〉ことを知覚しながら進める。また、《“しんどさ”に気持ちを寄せる》、《“しんどさ”を軽減する》という支援

を拡大していくときは、〈母親の生活上の変化に着目する〉ことを行っている。

以上、本論文は、保健師が虐待問題を持つ母親に対して【しんどさへの支援】を中核カテゴリーに位置づけることにより、支援対象を虐待された子どもだけでなく、加害者である母親をも含めて考え、母親の立場から支援を行っていることを明らかにした。その方法として、保健師は、自ら支援を求めてくることはほとんどない母親の“しんどさ”という脆弱性に気づく。これは虐待を“発見”することである。そして、母親とつながりの気持ちを示すことを基盤にした日常生活における具体的な指導を通して、母親の心理・社会的問題の根本的な解決を目指した支援を行い、虐待発生を“予防”する。虐待防止活動のなかで特に重要と位置づけられ、保健師に期待されている虐待の“発見”、“予防”という支援を保健師は、「“しんどさ”があることに気づく」、《“しんどさ”に気持ちを寄せる》、《“しんどさ”の本質を見極める（問題の本質に対するアセスメント）》、《“しんどさ”を軽減する》というプロセスで行っている。これらの結果は、母親の立場から、彼らの個別性を尊重した支援を行っている保健師を対象とし、彼らの実践活動を分析することにより導き出すことができた成果である。虐待防止活動は、子どもの保護から家族（母親）を含めた支援へと志向してきているため、本研究から導き出された支援内容を実践において活用していくことにより、虐待防止活動の発展に貢献できると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。